

東広島市に平賀氏の事跡を探る

——神辺城、弓矢の対決の真偽—— 小島 袈 袈 春

平賀氏の歴代の中で、私が知っているのは平賀隆宗だけである。知っている、といっても、天文一八年（一五四九）大内方の武將として、敵の尼子氏に味方した山名理興（たなま）の守る備後国の神辺城を攻略し、大内氏とそれに続く毛利氏の備後・備中制覇に大きく道を開いた事跡についてのみであって、隆宗一族の所領や系図等については余り知識はないのである。

そこです、私が関心を持った神辺城の攻防戦から記してみる。

事は天文一一年（一五四二）、大内義隆が大挙して敵の尼子氏の本拠地、出雲の富田城（とけ）を攻撃した時から始まった。それは前々年の天文九年（一五四〇）、尼子晴久が三万の大軍を以て大内方の毛利氏の本拠地、郡山城（こがねやま）を攻撃したが、遂に破れて出雲に逃げ戻った時、それまで日和見（ひよりみ）をしていた石見（いしみ）、出雲、安芸、備後の中小豪族、十三氏が大内氏に味方して「尼子氏撃滅の好機会」と、大内氏の重臣達に進言したからであった。

ところが、天の時未だ到らず、攻めあぐむうち、先の十三氏が今度は尼子方に寝返ってしまった。この辺りが戦国武士の本領なのである。大内軍は散々に破れ、義孝の後継予定者、晴持を始め、小早川家当主の正

平等々多くの犠牲者を出したのであった。天文一二年（一五四三）五月の事である。

その上、寝返りの首謀者、山名理興はさっそく尼子方として動き始め、翌六月には安芸の小早川氏の領地にまで攻め込んできた。そこで、大内氏は弘中・毛利・小早川・平賀の各氏に命じて防戦し、進んで山名理興の本拠、備後の神辺城を囲み攻撃したが、落城せず、戦線は膠着したまま六年間が過ぎて天文一八年（一五四九）を迎えたのであった。

その四月、平賀隆宗は大内氏に「山名理興には宿怨（しゆくゑん）があるので、我が一党に攻撃を任せて頂きたい」と願い出て許しを受け、同九月遂に攻略に成功したのである（『大内氏実録』）。

しかし、この荣誉を受くべき平賀隆宗は『平賀家家譜』によると、七月頃すでに病死していた、というのである。

『福山市史』を始め現代の諸書は、その所を「家臣たちが遺志を継いで激しく攻撃したので……」と常識的に記しているが、私はもうひとつの説『陰徳太平記』及び『西備名區』等の記述が心に浮かび上がるのである。それによると、

天文一八年（その年）、平賀隆宗は書を以て「血斗」を申し入れ「理興は矢二箭を射、隆宗は甲冑にてこれを受ける、隆宗死すれば我が軍兵を安芸に戻す。理興射外せば開城せよ」と宣誓した。弓の名手である理興はこれを受けて、月明りの夜、城の尾崎で六〇間（一〇〇m 余り）を隔て、二人は対峙した。理興の第一矢は見事隆宗の胴に命中したが、雁又の矢先が刀と当って軽傷で済んだ。第二矢は兜の頂きに当って跳ねてしまった。隆宗は勝利を宣言し、理興は約定に従って出雲に去った。

というのである。ここにもう一つ、目黒秋光という出雲武士の件がからむ。

秋光は尼子晴久から理興救援を命ぜられ、兵士五百人を連れて出雲を出発したが、途中で理興に出会い、事情を知ると憤懣に絶えず「主君に必ず勝つ、と広言したので出雲には戻れない。神辺城で武士の意地を示す」と、只一人平賀の陣に到って検使を頼み、城下の禅寺に入って切腹した。

とあり、その墓が今も神辺の龍泉寺に残っている、と記してある。

このふたつの挿話は何を物語るのであろうか……。余りにも講談じみた筋書からか、または『平賀家譜』を絶対視するためか（私もそうであったが）、現代の歴史書が俗説として無視するこの物語には、事実のか

けらもないのであろうか！。私にはどうしてもそうとは思えない所が出て来た。そこを少し掘り下げてみたい。

一、目黒秋光の件である。

彼の墓と伝えられるものが神辺町の龍泉寺に現存する。こごめ石製で、幅約九〇cm、高さ約八〇cm、元は石屋根や石扉の付いた、「くど墓」といわれる形式の立派な墓である。出雲から特別供養に遣わされたという僧の碑もある。初め会下谷にあつたが、福島家の時、寺の移転と共に現在地に移したようだ。当時から秋光の墓として有名だったのであろう。目黒秋光は実在し、確かに切腹したのである。

二、神辺城は堅城であつた。

各資料によれば、天文一二年（一五四三）以降、大内連合軍の数度の猛攻、総攻撃に六年間も耐え抜き、その間、天文一六年（一五四七）には坪生要害等の外部を失つた後も二年余も持ちこたえたのである。それが兵力激減した平賀一党相手に、簡単に落城したとは思えない。目黒秋光の来援情報もあつたであろう。むしろ悠々と城を出る理興軍に平賀一党は手も足も出なかつたのではな

いか、と推理できるふしがある。

三、平賀隆宗は死亡したとはいえ、一党を以て六年間も抵抗した神辺城を攻略して尼子方の備南拠点を粉砕し、大内方の備中進出にも道を開いたのである。この抜群の功績に対して大内氏は恩賞を約

束したように思える。神辺城の管理権は確かに平賀家に与えた。

が、その代りに（？）隆宗の夷弟、新九郎に家督を許さず、義隆の寵臣で平賀氏とは血縁のない小早川隆保を養子として送り込んだ。これは不思議な事である。これが功績に対する恩賞といえるであろうか？ 当主が死して跡継ぎがなければともかくとして、立派に成人して兄と共に神辺城を攻めた夷弟の新九郎を差し置いての養子相続とは……。祖父弘保を始め一族は血統の断絶に騒然となった事であろう。だが、大内氏に反論は出来なかった……。それはこの戦いが正常のセオリーの勝利ではなく大内氏の心証を著しく害した、と推定できるからである。

私は隆宗が重傷を隠して勝利宣言を行い、旬日の内に死亡した、と考える。必ずしも系図や家譜が正しいとはいえぬ。これも又史家の実証する所である。

大内氏はこの重要な戦いで博奕のごとき方法を用いた平賀一党の軽率さを嫌ったのであろう。その理由は万一逆の結果になった場合の大内方のダメージの大きさを考えれば分かる。それに大内氏は都風の形式好みで、後年、武断派の陶隆房等の反感を得て亡んだ様に、勝つためには手段を選ばぬ、という戦国武士の心情は理解できなかつたと思うのである。

まだまだ論点は沢山あるが、ここは一応これで停めて、私が現代の説について以上の疑問を持つに到った。墓所の所でまた改めて述べてみ

たい。

とにかく、平賀隆宗は一族の期待を集めながら、その意に反した形で神辺陣中に二六歳の若き命を散らしたのであった。『平賀家譜』には隆宗の死亡の真相を勝利に結び付けて公表できない無念の涙が隠されている、と私は思うのである。

◎頭崎城跡

東広島市高屋町、安芸の国分寺跡が残り、また、国府の跡の推定される西条盆地の北東部一帯が、その平賀氏一族の本貫の地とのことである。その高屋町の北部、河内町との境近く山なみの続く中の最峻峰（五〇四m）頭崎山がその城跡であった。

眺望良好で、高屋町全域はもちろん、遠く西条盆地全般、竹原方面も見渡せる。現在は公園として整備されて、三の丸まで車で登ることもできる。

頂上は逆台形で、広い甲の丸、帯曲輪を間に南に下って南北に長い二の丸、南東に十数m下って頭崎神社を祀った三の丸、この社は大永五年（一五二五）大内軍と戦って勝利したことを記念して招請した、との事である。たぶん先祖の藤原氏の守護神、春日神ではなからうか（平賀氏には源義光の系統で、小早川氏の事実上の先祖・信濃平賀氏もあるが、高屋平賀氏は藤原氏との事である）。

三の丸から南に一段上って太鼓丸、三の丸から今度は西南に下って煙硝場がある。その付近一帯は大巖壁が形良く露出して、古代の祭祀

場「巖座」を思わせ、エンシヨウ場は築城以前からあった山岳信仰に關係する「禪定」場の転化ではなからうか。この辺りはその様な雰因氣がある。また、郭の中央に累々と重なった岩石に明治神宮が祀られていたが、これは近代の事であって、昔の神は枯却されたのである。

なお、注目すべきは、この城は湧水豊富で井戸の必要はないとのことであった。

さて、資料によると、頭崎城は大永三年（一五二三）頃、第一五代平賀弘保が主城として築いたが、当時、尼子幕下にあったので前述の如く大内氏の攻撃を受けた、との事である。弘保はその後の城に長男の興貞を置いたが、大内、尼子と揺れ動く乱世の中で、白山城に残った弘保との間に「御父子御取合」と呼ばれた、骨肉の戦い五年間の後、天文九年（一五四〇）に至って、興貞が出家して竹林寺に隠棲し、興貞の長男隆宗を城主に立てたのである。だが、その隆宗が前述の様に、天文一八年（一五四九）、神辺陣中に死去し、大内義隆の意向で小早川隆保が養子として入城した。

ところが、天文二〇年（一五五一）陶隆房の謀反によって大内義隆が自殺すると、さっそく陶派の毛利氏に攻められ、平賀弘保の頭崎城は初めて落城したのであった。

同城は南を正面とし、東西とも堅固だが、西北は緩やかな鞍部を隔てて大将陣と呼ばれるピークがある。天文二〇年（一五五一）の戦いの毛利元就の陣所との伝承があるとの事だが、この辺りが同城の弱点と私にも思われるのであった。

さて、その後はめでたく隆宗の弟の新九郎が継いで、毛利氏の幕下に入り、以後この城での戦いは途絶えたのである。

「人間万事賽翁が馬」の格言を地で体験した祖父弘保は永禄元年（一五五八）、八四歳で没したそうだが、満了した事であろう。まるで内訌のための築城の様でもあるが…。

◎御園宇城跡

頭崎城跡の西南約三Km、高屋堀にその城跡はある。

北から張り出した低丘陵を切断し、南端に東西約一〇〇m、幅二〇m前後の第一郭、一段上って約六〇mぐらい、ほぼ方形の中心部、それを馬蹄形に高さ四〜五mぐらいの土塁で囲み、土塁の上幅も五〜一五mぐらいの長大な郭とした珍しい構造である。土塁の北、堀切に面した菱形の郭もあるらしい。比高は二〇mぐらいである。この特異な構造の故か早くから有名な城跡で、私なども平賀氏の事はほとんど知らないのに御園宇城の名称だけは知っていて、見学したいと常々思っていたのであった。

諸書の説明の中には、鎌倉時代の典型的城跡という向きもあるが、私の見学の感想を独断でいえば、この辺りの鎌倉期の城跡は丘の末尾を切断して削平した単純な構造が大部分なのに、当城は防備を十分に考慮し、相当の兵力が籠ることを前提にした縄張りで、戦いの経験を積んだ、南北朝頃の築城か、またはその頃の遺構に大改修を加えたものと考ええる。

果たして、室町期の初め応永の乱（一三九九年、大内義弘が堺で挙兵

し敗死)の後、安芸守護の交替を巡る戦いで、当城に拠る、第一〇代平賀弘章は反守護の大内盛見に味方し、応永一〇年(一四〇三年)から三箇年もの激戦・籠城に耐えたとの事である。見掛けによらぬ堅城なのであって、以後、文亀三年(一五〇五)第一五代弘保が、白市に白山城を築くまで百年余に渡る平賀氏の拠点となったのであった。

◎伝平賀氏墓地

御園宇城の北西一〇〇m、平賀氏初期の居館の可能性が高いという、明道寺跡という所に数十基の五輪塔や宝篋印塔が整然と並ぶ様子は見事であって、平賀氏の歴史と由緒を物語るものでもある。

その西端近く一際大きく立派な宝篋印塔は「天巖」と陰刻してあって、前述の隆宗の墓との事である。その南のやや小振りの宝篋印塔は「眞岳」と陰刻があつて、隆宗の祖父弘保の墓との事。

隆宗より九年後の死去で、白山城及び頭崎城を築き、時代を的確に読み取つて、大内、毛利路線を揺るがず、当主の新九郎を盛り立てて平賀氏全盛につくした弘保の墓が前代より立派な事は頷ける。

しかし、弘保より九年前、神辺陣に死去した血統交替の元となった孫の隆宗の墓がさらに立派で、伏鉢等の形から建立年代も新しい事が何とも不思議で、眺めるうち、現代の史書が無視する『陰徳太平記』等の記述は相当の真実を持つのではないか、との疑問が湧いて来た。それが前段で提起した論点なのである。

そこで、最後に墓石について私の仮説を記してみたい。

本来なら血統の交替になった平賀隆宗の神辺陣中の死、一族の期待と伝統を裏切る結果となった事態と、大内氏や養子隆保への遠慮から墓は小さかったはずであるが、間もなく偶然ともいえる大内氏の没落と毛利氏の決断に助けられて、血統は回復された。やがて祖父弘保が死去し、十数年後、毛利元就もまたこの世を去った。

隆宗死して二十余年、当時を知る者も少なくなつた。毛利氏の中国制覇は着々と進み、平賀氏もまた全盛を迎えると、一転して神辺城攻略の意義が再評価されてきた。天文二〇年(一五五二)の志川瀧山城における毛利氏の勝利も、これなくしてはなかつたかも知れぬ。

武門の若き頭領隆宗が自らの命をかけて、戦線膠着の打開を計つた矢の対決が、武勇の物語りとして正答の評価を受ける時代となつたのである。一族は隆宗を誇りとしたであろう。毛利氏もまた異論は挟まなかつたであろう。立派な墓に建替えられても不思議な事ではない、墓石の様式が新しいこともまた当然の事なのである。

(注) 参考資料は『広島県の主要城跡』芸備友の会編記述及びバス例会

見学資料

一九九四年六月